掲載日:2018年08月06日, 面名:くら左, 記事ID:KIJ20180806_A001000010K283001 (C)南日本新聞社

被爆体験 次世代へ

「若い世代の平和意識を高めたい」―。広島市で7月下旬、被爆体験談の伝承活動に取り組むミュージシャンHIPPY(ヒッピー)(本名・石川寛樹)さん(37)=広島市安佐南区=が講演した。南日本新聞をはじめ全国の地方紙記者10人が参加する、同市主催のジャーナリスト研修「ヒロシマ講座」の一環。要旨を紹介する。

広島市のHIPPYさん講演

バーで証言の会 「繰り返すな」思い引き継ぐ

被爆体験の伝承について話すHIPPYさん=7月29日、広島市中区の広島国際会議場(中咲貴稔撮影)

広島市内のバーで原則として毎月6日、被爆体験者の話を聞く「証言の会」を開いている。若者や外国人など、幅広い層が集まっているのが特徴だ。2006年に始まり、今年8月で153回。県内外の被爆者約100人が話してくれた。

会は元々、被爆3世の冨恵洋次郎さん(広島市民賞受賞者)が取り組んでいたが、昨年肺がんを患い37歳で亡くなった。会の存続を託され、意志を引き継いだ。バーで開くことに対しては「原爆を売り物にするな」という批判の声もあるが、毎月絶やすことなく続けている。

会に参加し始めた7年前、初めて被爆者の体験談を直接聞いた。自分自身は広島で育ち、学校では平和教育を受けてきた。「原爆や被爆者に対する知識はある」と思って過ごしてきた。しかし、思い込みだった。自分が暮らす町や身近な人の事を何も知らない自分に気付かされた。

会では、被爆者の人生を中心に聞くようにしている。被爆という事実の延長上に、今の自分たちがあるのだと実感できるし、生き方を見直す機会にもなっている。

しかし、現時点で話ができる人は、被爆当時10歳前後が中心。被爆者の平均年齢は82歳を超えたという。体験を本人の口から聞ける機会は、あとわずかだろう。認知症なども課題となっている。

体験談を聞かせてもらえることは当たり前ではない。50年以上たって初めて、人前で語ることができたという人もいる。

数年前、自身の活動が新聞報道された時のこと。伯母に「祖父は被爆者だった」と聞かされた。父親ですら、その事実を知らなかった。もし生きていれば百歳。「なぜしっかり聞いておけなかったのか」という後悔と同時に、「語るにはそれほどシビアな話題なのだ」と痛感させられた。

現在、広島市の「被爆体験伝承者養成事業」に参加し、伝承候補生として学んでいる。この先は「体験談を聞いた経験がある人の話を聞く」という時代になると考えている。

「戦争を知らない世代」が「知らない世代」に伝えることは、体験が伴っていないため難しい。ただし、被爆の「事実」と「絶対に繰り返してはいけない」という思いは、どんなに時代が変わっても伝え続けることができるし、伝えなければならないと思っている。(中咲貴稔)

ズーム 広島市の被爆体験伝承者養成事業

高齢化が進む被爆者の体験談を後世に伝えようと、広島市が「伝承者」を公募し養成する事業。被爆者と月1、2回程度の交流やフィールドワークを重ねるなど、少なくとも3年間の養成課程を修了した人が認定される。「伝承者として委嘱を受けた人は、平和記念資料館などで講話活動に当たる。今年7月時点までに応募者484人のうち、117人への委嘱があった。